

---

# 恋姫 ” Double ”

haruto

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫” Double ”

### 【Nコード】

N3706I

### 【作者名】

haruto

### 【あらすじ】

自分の人生に絶望し、自殺を試みる主人公。

しかし、そんな彼が勇気をだして学園の屋上から飛び降りたにも関わらず、待っていた結末は女の子になっていたというものだった。

## 二人の蓮華

高い空。ずっと遠く、高くまで雲が流れていてた。

俺の足元には、随分下のほうに見えるが校庭が広がる。当然だ。俺は今、学園の屋上にいるんだから。

屋上。校舎の一番上。高い。めっちゃ高い。

しかもただの屋上ではない。屋上に備え付けられている柵の上に立っている。………やっぱり高い。

ここから飛べば、確実に死ねるだろう。

うん、そうだ。俺は死ぬためにここに来た。もう嫌なんだ。こんな生活。こんな世界。

ただ、なんだ。その、一応言っておくのは礼儀だろうか。というか、やはりこれだけ高いところから校庭の生徒達を見下ろしているんだから、やはり言わねばならんだろう。それがたとえ自殺前であろうと！

【??】「みる！！人がゴミのようだ！！！」

反応するものではなく、ただ風が吹き抜けた。

下ではいつもどおり、キャツキャウフフと会話を続ける生徒。

ああ、何してるんだか。これじゃ本当に馬鹿みたいだ。もういいや。

何もかもめんどくさい。

しかし…ドラマとかでよく自殺する奴が土壇場になってうるたえて  
いるけど、あれってやっぱり演技だったんだな。

マジで死ぬ気になったらここまで落ち着けるのかってくらい、気持  
ちは静かだ。

てか、やっぱり痛いのかな。ぐちゃってなるのかな。

まあ、いいか。どうせその頃には死んでるだろうし。

【??】「ふう……………おし」

柵へ引つ掛ける足に力を込める。両手を離して、体重を前へ。

そして、短距離走のロケットスタートのように、両足で思い切り柵  
をける。

【??】「アイキャンフラー……………イ!!!!!!」

うむ。やはりこれも言っておかねばならん言葉だ。

そして、一瞬の浮遊感の後、重くのしかかる重力。

これでもかと大気を突き抜けて、どんどん加速する。どんどん大地  
が近くなる。

迫り来る死。やはり直視できるものではなく、俺は目を閉じた。

そして。

……。

……。

……。

あれ、痛くない？っていうか、また俺落ちてないか？

すでに飛び降りてから数十秒。とっくに地面と激突し、俺の体はともじやないが放送できるような状態じゃないはずだ。

ぐちゃぐちゃに肉や血が飛び散って、あちこちから白い骨が突き出て、頭からは生暖かい乳白色のドロドロがこぼれているはず。

……。

想像したら気持ち悪くなってきた。





さすがに叫びすぎた。

しかし、改めて地面を見る。そこには校舎が広がっているはずだった。

しかし、俺の目に映ったのは一面の荒野。というか大陸。

空からだ、あらためて地理の授業で配布された地図がいかげんかわかるな。形がまるで違う。

って、これ……かの有名なユーラシア大陸というやつですか？

それでもってたぶん、この真下って中国辺りじゃないのか？

ってというか、これ海に落ちそうじゃね？かなりギリギリ？

【??】「……………ああ…ま、いいか。たぶん俺死ぬし」

というかこの高さなら下が水だからとかも関係なく死ぬそうだ。

しかし、そう思った瞬間。

あらん、まだ死なれちゃだめよん

【??】「はい？」

ん、ちよつとばかり場所を間違えちゃったみたいねえ……まあ、問題ないかしらん





える。

ってか、城？なんか中華っぽいけど……ってそりゃそうか。ここ中国だった。

やがて、地が目の前までやってくる。先ほど見えた城が真下にみえる。

あああ……終わった。

俺はもう一度目を閉じる。

そして、数秒後。生々しい不快な音と共に俺の意識は途絶えた。

【蓮華】「ん……………」

目が覚める。目の前にひろがるのはかなり豪華な天蓋。

といつか、ベッドだ。

【蓮華】「…ちょっと硬い……ベッドじゃないのか……ん？」

あれ、誰だこの声。なんか妙に女っぽい。つか女だ。

俺は、自分の体を見してみる。

【蓮華】「空から落ちたのに無事……？……ていつか、何これ……」

ムニユ

胸にくっついてる妙にやわらかいものが二つ。

揉んでみる。

【蓮華】「んあ……え？」

ちょっと気持ちいい。……いやいや。

やっぱりこれって、おっぱい？胸？バスト？

とりあえず、体全体を立ち上がって眺めてみる。

ん、完膚なきまでに女だ。しかも相当なスタイルだぞこれ。

そうか、実は俺、女だったんだ……。……ちがうだろ。

(ん……………あれ…？私…起きてる…？)

頭の中に突然声が響く。しかし、先ほどのように野太い声ではなく、女の声。

しかも、どちらかという美人声だ。

【蓮華】「ん、なんか声が…」

(へ…？なんで勝手に私が話しているの!?)

【蓮華】「え、私？…え？」

(……………き、貴様、何者だ!!この私を孫仲謀と知って)

声が急に怒り、叫びだす。

【蓮華】「つつ……………朝からでかい声出すな…頭が痛い…」

その声が頭の中に響き渡り、大音響となって俺の脳を締め上げる。

(痛っ……………な…なんで……………)

彼女 声もどうやら苦しんでいる。

まったく、何がどうなっているのか。

(くっ……………とにかく、私の体を返してもらっぞ!)

【蓮華】「どうやって?…」

(……………は?)

【蓮華】「いや、俺も今日覚めたばかりで、いきなりこの状況だし。つか、お前まじで誰？」

(……………。)

突然声は黙り込む。

【蓮華】「つて、ちょ、ちょっと待った。待て待て！」

(……………お前、私の体に何もしていないだろうな)

【蓮華】「え？あ、ああ、起きるときちょっと胸触ったけど」

(思春……!!今すぐ私を斬れ……!!こいつごと殺してくれ……!!)

【蓮華】「つつっ……!!だから、でかい声だすなって……」

(…ったあ……くう……)

【蓮華】「はあ、とりあえず、アンタがこの体の主なんだな？」

(……………そうだ。だから今すぐ返してくれ)

【蓮華】「それが出来ればとっくにしてるよ……」

(……………。)

あ、落ち込んだ。目に見えて落ち込んでる。いや、見えてはいないんだけど。

(落ち込んでなどいない!!!)

【蓮華】「ぐ……ば、馬鹿……いい加減学習しろ……」

(つつつつ~~~~~!!!)

自分で苦しんでちゃ世話ないな……

(……つ……つるさい……)

俺はとりあえず、鏡の前に立つ。

【蓮華】「うわ……すっげえ……」

(な、何をみている!!!)

【蓮華】「お前って、めっちゃくちゃ美人なんだな……」

マジで感心してしまった。学園で結構アイドルとかいわれてる奴なんて屁に見える。

綺麗な桃色の長い髪。大きく、深い青色に輝く瞳。

(……………。)

急に声は黙りこむ。

【蓮華】「ん、どした？照れてるのか？」

(……………だ、黙れ!!)

【蓮華】「……………っ……はぁ……わかったから、いい加減覚えような。」

(……………っ!!……………むう……)

あ、すねた。ちょっとかわいい。

(……………)

【蓮華】「ん、そうか、頭で考えた事も伝わっちゃうんだな……」

実に面倒だ。

(ふん。余計な事を考えるからだ)

声がある程度落ち着いてきて、俺もようやく現状を整理しようとしたとき。

【小蓮】「姉さま……!!……もう!!いつまでねてるの!?!……………っ、起きてる……」

【蓮華】「へ!?!」

え、え、え、なに?この子。

姉さま?え、妹?

(妹の孫小香だ。弓腰姫といえば、わかるだろう?)

弓腰姫?.....孫小香.....。

うん。分かる。アレだ、三国志だ。

たしか、孫権の妹で劉備の奥さんになるヒトだ。

あれ...?

妹???

【蓮華】 「小香.....ちゃん?」

【小蓮】 「...は?.....姉さまったらまだ寝ぼけてるの?..?」

(妹の事はシャオ.....あああ...しかし、こんな奴に真名を.....)

【蓮華】 「真名?」

【小蓮】 「.....姉さま大丈夫?」

妹 孫小香がこちらをのぞき見る。

その顔は本気で心配しているようだ。

【蓮華】 「あ、ああ。大丈夫。」

【小蓮】 「そう?.....じゃあ、シャオ行くね。みんな待ってるんだ



から、姉さまも早く来てね」

【蓮華】「う、うん。わかった」

(はぁ……………)

まずい、かなりわけが分からん。

整理できそうになったところでまったく新しい要素が出てきやがった。

【蓮華】「なぁ、お前もしかして、孫権って名前だったりする？」

(さきほど名乗った……って、何故権の名を……)

【蓮華】「……………うん。とりあえず、置いてこう。今は分からん事だ。」

(おい、どういふことが説明しろ!…あと、お前の名を教えないつもりか!)

【蓮華】「あ、そうだった、名前まだ言ってなかったな。…っついてい  
うか、頭の中で言わないとこれかなり変な奴だな。」

(……………私の体だということを忘れるなよ)

分かってるさ。俺の名前は……………あれ?

あれ、あれ?

名前。マイネーム。あれ？

……………え、嘘。まじで？

(ん？何を言ってるんだ？)

……………名前が、わからない……。

(……………はい？)

。

今までの人生に嫌気がさし、俺は自殺を試みた。

俺が所属していた、聖フランチェスカ学園の屋上から。

おそらくあの学園では俺がはじめての自殺志願者だろう。

なにせあのお嬢様学園だ。それはそれは平和に時間が過ぎていた。

だが、そんな中で俺は、ひとり浮いていた。だからこそ、自殺なんて行動に至ったのだろう。

飛び降りた。屋上から。それでもかと今までの人生を振り切るように、まっすぐ前へ飛び立ち、すぐさま下へおちた。

そこで、俺の意識は飛ぶはずだった。

なのに、俺の意識はそこで途絶えるどころか、むしろ体はどんどん加速し続け、落下を継続する。

死ぬ寸前になって目を閉じた俺は、その異変に気づき、目を開ける。すると、そこは眼下に広がっていた校庭ではなく、はるか上空数千メートル。

かみなり様とこんにちはできる高さだ。

戸惑い、それでも死を受け入れようとした時に、俺に語りかけた声。あまり思い出したくも無いが、あれは忘れられそうに無い。

そんな声が語らなくなった時、俺は目の前に街を見た。そして城を。そして、もうひとつ……

【??】「……………」

【蓮華】「……………」

おそらく、死ぬ寸前。

目が、合った。

そして、世界は赤色に染まる。

一瞬のありえないほどの激痛。その後には俺は意識を失った。

(名前がわからないって、どういうこと?)

【蓮華】「普通に考えて…記憶喪失？」

そして、次に目が覚めたとき。俺は女の子になっていた!!

いや、冗談ぬきで。

(……………)

【蓮華】「あれ、もしかしてめっちゃくちゃ怪しんでる？」

(……………どうすれば、怪しまずにすむのか聞きたいくらいだわ)

まあ、それはたしかに俺もおもう。自分で言うのもなんだが、今の俺はめっちゃくちゃ怪しい。なんだろう、限りなく漆黑に近い黒といった感じだ。

【蓮華】「ん〜……………考えても分からんしな」

(……………最低だわ……………)

とにかく、いつまでも悩んだってしかたない。

とりあえず現状の整理だけでも……………

【思春】 「蓮華様」

つけようとしたところで、また誰か来た。

つか、れんふぁ様？孫権様じゃなくて？

【思春】 「お時間が過ぎてもらっしやらないのでお迎えに上がりました。」

【蓮華】 「あ、あ、うん。ごめんね」

【思春】 「……………??」

突然現れた女の子は、こっちをみて、少し不思議そうにしている。

あ、口調か。

(あぁ……………思春……………)

【思春】 「その、蓮華様。お着替えにならないのですか？」

【蓮華】 「え？」

その言葉でようやく気づいた。っていうか、知ってたけど気に留めていなかった。

今来ているのは、寝巻きだ。

どうりでスースーすると思った。

【蓮華】「あ、うん。すぐに用意するよ」

【思春】「はあ」

やはり不思議そうに、その子は扉を閉める。しかし、その前から動く気配はなく、どうやら待っているようだ。

【蓮華】「まあ、着替えもそうなんだが…」

俺はできるだけ外に漏れないように小さい声で話す。周りから見れば、一人でひそひそ話。はっきり言ってキモイ。

【蓮華】「お前、孫権じゃなかったの？蓮華って？」

(……………勝手にその名を呼ぶな！体を奪われた上に真名まで奪われるなど…)

【蓮華】「真名……………」

孫権の口調からすると勝手に呼んではいけない名前らしい。

【蓮華】「ま、いいや。……………ん、待て。じゃあこの後外に出たら、その真名ってやつを呼ぶことになる相手が出てきたりするんじゃないな

いのか？」

（ええ…もちろんいるわよ。さっきの妹とその後に来た思春もそう。）

【蓮華】「もし、勝手に呼んだら？」

（わが剣の錆になってもらうわ）

大げさだなーという言葉は言わないでおく。

（そのくらい大切なものなのよ）

しまった。俺こいつには隠し事できないんだった。

考えただけで伝わるなんて少し不平等じゃないか？なんせこっちから孫権の頭を読むことは出来ない。

（自分の体を好き勝手に動かされるほうが、遥かにひどいと思うわ）

………たしかに。

既に目が覚めてから、どのくらい時間がたっただろう。混乱していた思考も徐々に落ち着いてきた。

それは孫権も同じなようで、先ほどのように大声を連発はしなくなっていた。

とりあえず、着替えだけは済ませようと、衣装棚のほうへ向かい、おもむろにあける。

【蓮華】「OH!..!」

(ば、ばか!..!はやくしめなさい!..!)

そこは楽園だった。青、白、ピンク、黒と様々な色の花が咲き乱れ、俺のポルテージを一気にMAXへと打ち上げる。

(いいから閉めて!..!)

孫権がうるさいので、一通り眺めてから閉めた。これは脳内メモリー永久保存版に登録しておこう。

(そんなことしたら一晩中叫んでやるわ)

.....さようなら。俺の楽園。

実害を避けるためだ。また尊い命を失ってしまった。

(いいから、目を閉じてはやく着替えなさい)

また無茶な事を.....

とりあえず、別の引き出しを開け、俺は服を取り出す。

なんというか.....もうすこし隠すところ隠そうぜ。

(.....隠すとどう?)

【蓮華】「.....いや、いい。とりあえず脱ぐぞ」



(目あけたら承知しないわよ)

はいはい。

ムニユ

とりあえず、服を脱ぐ際に右手で左胸をもんでおく。

(ん……………こら！何をしている！！)

悪い、当たっちゃまった。次気をつけるよ。

ムニユ

ムニユ

(ん……………あん……………き、貴様！！！)

冗談だよ。すぐに済ませる。

遊ぶのも楽しいが、外で待っている子がいるのを考えるとそれほど時間もかけていられない。

俺は手早く、服を脱ぐ。薄手の生地で、それほど苦勞はしなかった。

(……………やはり遊んでいたんだな)

孫権のぼやきは無視して、俺は次に着るべき服に手をかける。

そこで手が止まる。

(…ん？何をしている？)

これ、どうやって着るんだ……？

(どうやってって……あ……)

ん、どうした？

(…い、いつも、思春に手伝ってもらっていたから…)

【蓮華】「まじかよ……」

つい声に出してしまった。

【思春】「蓮華様？」

【蓮華】「あ……え、えと」

まずいぞ、当然のことながら女の子に着替えの手伝いなんてさせたこと無いからどういえばいいのかわからない。

【蓮華】「服……着せてくれない…かな……ひとりだと着れなくて」

【思春】「は」

短く、それだけ言って、その子は部屋へと入ってきた。

うわ…恥ずかしすぎるぞ、これは。

【思春】「れ、蓮華様？……なぜ目を閉じて…裸のままです…」

あ、しまった。目を閉じておけといわれたままだ。しかも裸。

いくら着替えを手伝ってほしいといっても、これは準備万端過ぎた。

【蓮華】「き、きにしないで。」

【思春】「はあ。畏まりました。」

そういつて、思春は俺がさっきまで持っていた服を持ち、まず腕から俺に服を着せ始める。

【蓮華】「ん……………」

ちょっと気持ちいい。というか、くすぐりたい。

思春はてばやく俺に服を着せていく。かなり手馴れているようで、ずっと任せてきたというのはどうやら本当らしい。

【蓮華】「ふう……………ありがとう」

【思春】「いえ。では広間へ急ぎませう。」

【蓮華】「あ、うん」

すっかり忘れてた。この子が待っていたのは、俺を呼びに来たからだ。

( ……………分かっているとはおもっけど、勝手に真名を呼んだりしたら…… )

分かってるよ。俺だってまだ死にたくは……………って、あれ？

( ……………？どうしたの？ )

俺、自殺しようとしてたのに……………あれ、どうしてだろ。…なんだ？

( は？自殺？何を言ってるの？ )

なんで、死のうとしたんだっけ……………あれ？

……………え？

俺、フランチエスカで……………何してたんだっけ。

なんで、死にたかったんだろ……………

【蓮華】 「名前、だけじゃ…ない？」

【思春】 「蓮華様？」

自殺しようとして屋上へ行った時。それより前のことが分からない。

分からない。

分からない。

なんで？……………記憶喪失？え？

名前が分からない時点でおかしいのだが、混乱しないように保留にしたことがここにきて逆流してきた。

（お、おい……………落ち着け！）

昨日俺、なに食べた？

その前は？授業の課題はどんなものが出ていた？

友達の名前は？……………いや、そもそもいたのかもわからない。

なら、家族は？

……………わからない。

（おい！……………！！！！！！！！！！）

【蓮華】「くうっ！！！！！！！！！！」

【思春】「蓮華様！！」

脳内で馬鹿でかい音が響く。

それに耐え切れず、俺の思考が止まる。

（っっ……………落ち着いたか）

あ、ああ……ありがとうございます。

( )とりあえず、今は広間へ向かえ。それが終われば時間は作れる。(

………わかった。

【蓮華】「……だい、じょうぶ……」

【思春】「体調が悪いならいつでももおっしゃってください。………  
……今日の蓮華様は、すこしおかしく思われます。」

( …… )

【蓮華】「うん。ありがとう」

おかしいのは、別人だから当たり前のことだ。

しかし、今はまだ説明できない。本人ですら混乱しているんだから。

ほとまず、広間へ向かうことにする。いいかげんこれ以上遅れるわけにもいかなそうだから。

。

思春と呼ばれた少女について行って既にどのくらい時間が過ぎただろう。俺の記憶では既にもうかれこれ10分以上歩いている。建物の中をそんな時間歩き続けるなんて経験あるだろうか。いやまあ、公共施設などに行く際はたしかにそれくらいはざらにあるかもしれない。しかし、ここは言ってみれば家だ。この体の主、孫権の。そんな建物の中をそれだけ歩くということは、それだけ広いということ。前を歩く思春は特に気にする様子も無く、当たり前のように歩いている。ここに住む者達にとっては、これが当たり前なのかも知れない。

俺はといえば、慣れない体というのもあるのだろうか。こうして歩いているだけで結構疲れが出始めている。

(情けないな。男だろう?)

頭の中で体の主 孫権が嫌味とも取れるように話しかけてくる。

男だって、何もほいほい他人の体に憑依するようなことが起きるわけじゃない。本当なら俺は死んでいるはずだったんだ。まったく嘆かわしい事この上ない。

(自害など、馬鹿げたことをしようとするからだ。なにかあったのか?)

どうにも頭の中で考えたことはこの孫権にも伝わるようで、言葉に出さなくても俺の考えが分かる以上嘘もつけない。しかもどうやらそれは記憶にも言えるようで、俺が覚えている屋上からの記憶は

全てこいつには筒抜けだった。

そんな俺の記憶を知って何を思ったか、孫権は急に俺に問いかけてきた。しかし、俺の記憶なら見れるくせに、なぜ答えられないと分かっている問いをぶつけてくるのか。

(全部を知ることが出来るとは限らないでしょう)

全部、知りたいのかよ。

【思春】「蓮華様、着きましたよ」

孫権との会話に夢中になっていると、思春が声をかけてきた。いつの間にか、目的地まで来ていたようだ。

俺は頷いて、その扉のほうに振り向いた。

少し大きめの扉。ほとんどが朱色で構成されていて、隅々まで装飾が施されている。今更思うことでもあったが、やはりかなりの中華テイストだった。

思春は扉の中に声をかけた後、扉を開き、中へと入る。それに続いて、俺も中へとはいる。

【雪蓮】「蓮華」。おそいじゃないのー」



【蓮華】「え、あ、はい…。すみません」

中に入ったとたん、いきなり話しかけてくる桃色の髪のお姉さん。髪の色が孫権やさつきの孫小香とにているために、俺の中にまさかという予感が走った。

(姉の…孫策だ)

まさか。

まさか…と思いたいが、どうやらそれはかなわぬ夢のようだ。

【冥琳】「伯符。蓮華様もいらっしやったことだ。そろそろ始めるぞ」

後ろに立っていた黒髪の女性が声を出す。孫権が姉だといった女性に対して、“伯符”といった。伯符はたしか、孫策の字だったよな気がする。

孫家の兄弟の名前を一通り知ったことで、先ほど保留にしていたこの時代背景の問題がふたたび浮かび上がってきた。いくら中国だからといって、建物全部が木製というのはさすがに無いだろう。あつたとしてもこんな大きな建物に現代の建築家がALL木材で設計するなんてありえるのだろうか。…いや、あるかもしれない。だとしても、時々帯剣している人がちらほら見えるのはどうだ。その上明らかに時代錯誤な服装。

俺は既に半ば信じてみたくなくなっていた。自殺するような人生だったんだ。そんな人間が時代を超えて、こんな別世界に來られたら、どんなに愉快だろうか。周りは誰も自分を知らない。だからこそ、

やり直しのきく世界だ。

【雪蓮】「はい」

孫策の一言で、柱にもたれていた者、部屋の段差に腰掛けていた者、奥にいた者など、数人の者達が姿を現した。

先ほどの黒髪の女性は「まず…」と切り出し、いくつかの言葉を上げていく。議題のようなそれを聞く限り、どうやらこれは何らかの会議のようだ。

ある程度議題が上がると、今度はそれぞれが意見を出し始める。

なあ、孫権。

俺はとっさに孫権に頭の中で声をかけた。声をかけるというのを聞くと、頭の中で会話できるように聞こえるが、実際は考えるだけだ。そうすれば、自然と脳の中で声が響いてくる。ような気がする。

(……なに?)

…また急に不機嫌だな。それでもこの場を乗り切るにはたとえ不機嫌であるうと話をしないとイケない。

この会議、何について話してるんだ？

至極当然の疑問で、この場で孫権ならばどう振舞うのか。兎にも角にもまずそれをクリアしないとイケない。状況を整理しようにもさつきからその状況に流されっぱなしだ。どうにかして、一人になる時間を作らないと。

と、そこまで考えて先ほどの会話を思い出した。

しまった。あそこで体調不良装つときゃ考える時間もできなかったんじゃないのか。

自分の頭の回らなさに思わずうなってしまふ。

【穩】「蓮華様？」

思わずでたうめき声がどうやら聞かれてしまったようだ。また初めて見る女性に声をかけられた。

というか、先ほどの黒髪の人も孫策もそうだが、ここはなんなんだ。どいつもこいつも目のやり場に困る服装をしている。別に隠さなくてもいい場所ばかり隠して肝心の部分はどうだと言わんばかりに露出している。だがあえて言わせてもらおう。

ナイスオツパイだと！！

(ば、馬鹿！)

しまった、こっそり出来ない奴がいたんだった。

しかし、女の体というのはどうにも便利かもしれない。男ならば目に見えて現れるモノが無いのだから、多少の興奮は隠し通せてしまふ。約一名を除いて。

(き、貴様、私の体でそんな……)

冗談にきまってるだろ、落ち着け。

【蓮華】「なんでもないわ。きにしないで」

とつさに出た女性の言葉遣いに、自分で吐き気がする。しかし、ここをクリアするには耐えねばならない試練だろう。

(ていうか、話を振っておいていきなり自分の思考に浸らないで欲しいわ)

話?...あ、この会議のことだっけな。あんまりオツパイがすごかったから忘れてたよ。

(.....。)

ああ、悪い悪い。だから教えてくれ。頼む！

頭の中ではダイビング土下座くらいの勢いで頼み込む。

(はあ...これは、軍議というものよ。この孫呉の未来を考えた上で、これからどう行動すべきかを決めるためのもの。)

さつきから壱田だの縮図だの言ってるのは内政に関することってわけか？

(わかっているじゃない)

まあ、それくらいはゲームでも分かることだしな。

(ゲーム?)

俺は、別に気にするなとだけ孫権に返事をして、もう一度意識を外へ向ける。やはり各自それぞれの意見を出し合っているようで、俺の口を挟む余地はなかった。挟む気もなかったが。

【雪蓮】「まあ、こんなとこじゃない？あとは袁術のところに関してだけど…」

【冥琳】「そちらはおいおい決めていくとしよう。あの子供の考えることは予測がつかん」

【穩】「悪い意味で、ですよ〜」

どうやら”軍議”というものが終りそうだ。

しかし、袁術なんて名前も出てきた。今更のようだが、もう俺の中では八割がた答えは出ていた。なにより、おれ自身がそれを望んでいる。そうであってほしいと。ここが三国時代であってくれればいいと。

解散の一声を聞いてから、俺は踵を返して、入ってきた扉から出ようとした。しかし、そのとき、右手が引かれているのを感じて、後ろを振り返った。

【雪蓮】「蓮華、ちょっときなさい」

【蓮華】「へ？」

思わず情けない声をだして、俺は孫策に引きずられながらどこかへと連れて行かれる。孫策自身、力が強いのだろうが、さすがに女

の人に引きずりまわされるのは男としては少しつらいものがあつた。  
…今は女の体だけだよ。

引きずられたまま、押し込まれたのはとある一室。人気もなく、  
灯りをつけなければ昼間でも真つ暗だった。

孫策も同じように部屋にはいり、扉を閉めた。そして、次の一言  
で俺の思考は固まった。

【雪蓮】「あなた、誰？」

。

一瞬、何を言われているのか理解できなかった。心臓が跳ね上が  
るように強く脈動して、体中の血液がフルスピードで駆け回る。

【蓮華】「え…えと…」

【雪蓮】「蓮華が軍議で終始無言なんてありえないわ。始めは体調  
でも悪いのかと思っただけど、どうも違うみたいだしね」

ばれてる。何故か分からないがあの短時間。軍議の間だけで。

”特に会話もしてないのに”。

そこで俺もはっとした。

(だからよ……軍議において、私が姉さまと会話しないなんてあり  
えない。)

だったらなんで。そんな考えが起こる。教えてくれなかった。そうすれば……いや、だめだ。肉親と長時間会話するなんて自分から実は本人じゃありませんと言うようなものだ。

【雪蓮】「答えなさい」

【蓮華】「……………」

俺は、問い詰められることに慣れていない。そんなものに慣れなど持ちたくも無いが、こういうときに冷静でいられないのは俺の経験不足。あわててしまうことで、相手の意見を肯定してしまった。

【蓮華】「……まだ、よくわからないんです」

【雪蓮】「っ！」

だからこそ、俺にはハイレベルな会話の駆け引きなんて出来るはずも無く、素直に本音を言うしかなかった。ばれたらどうなるか分かったものではない。

俺の言葉に確信を持ったのか、みるみる孫策の表情が変化していき。

【雪蓮】「ひとつ聞いわ。蓮華はどうなっているの？」

【蓮華】「孫権なら、ちゃんといいますよ。表には出られないみたいですけど」

(……………。)

孫権はそんな俺の言葉に黙り込む。改めて自分の状況を再認識したようだ。

【雪蓮】「そう……ふふ……あはははは！」

孫策は俺の言葉を聞いて、何を思ったのか、急に笑い出した。

【蓮華】「え、え？」

【雪蓮】「ずいぶん面白いことになってるわね。これどうやったの？いつの間に？」

孫策は俺の（正確には孫権の）頭を撫で回すように触りながら眺めてくる。かがみながら触ってくるものだから、目の前に寄せられた乳に俺は思わず目が行ってしまふ。

【雪蓮】「……蓮華のこと、頭の中でおそっちゃダメよ？」

【蓮華】「…は？」

（な、なななななな、ね、姉さま！！！！）

【蓮華】「わっ…痛っ……」

突然の孫権の絶叫に頭蓋骨が軋む様に頭痛が起きる。

【雪蓮】「あら、どうしたの？」

【蓮華】「孫権が今のあなたの声聞いて、頭の中でわめき散らしてるんですよ。どうもでかい声で叫ぶと頭痛が起きるみたいで……」



ってか、なんか反応軽くないですか？」

【雪蓮】「へえ〜……まあ、そんなのどうだっていいじゃない。ところであなた男？」

【蓮華】「一応……心の中ではそのつもりです」

【雪蓮】「まあ、そんな素敵な体で男だなんて言っても説得力無いけどね」

あははと笑い出す孫策。なら聞くなと行ってやりたい。

(まっただくだ)

なにやら意見があったようだが、今はそんなことはどうでもいい。とにかくこの人をどうにかしないとイケない。

【雪蓮】「さて、それじゃあなたをどうするかだけど……そうね。しばらく蓮華のフリしてなさい。」

【蓮華】「え？」

【雪蓮】「下手にみんなを混乱させるわけにもいかないわ。私も協力はあるけど、あなたも気をつけてね。」

要するに何もなしって事？孫権のフリをするのはある程度覚悟していたことだから、今更問題は無いとして、この人はどういうつもりなんだろう。

(…………面白がっているだけだろう)

本気？一応妹の体のつとられてるんですよ？

(…そういう人なんだよ。……はあ)

【雪蓮】「あなた、名前は？」

【蓮華】「……………名前すか…。それが全然覚えてないんですよ…  
…はは」

【雪蓮】「覚えてない？……………へえ」

孫策がこちらを覗くように見上げてくる。その顔は妙にニヤニヤしていた。

【雪蓮】「名前ないと不便よね…。だったら蓮華の名前半分もらっ  
ちやいなさい」

【蓮華】「(は！！？)」

【雪蓮】「さすがに華くんってのはつらいだろうし、蓮でいいわね」  
なにやら勝手に俺の名前を決め始めた。

【雪蓮】「蓮でいいわよね、冥琳」

【蓮華】「え？」

疑問に思ったときには既にさっきの黒い髪の人が孫策の後ろに立っていた。

【冥琳】「はあ……止めても聞かんのだろう。…蓮、蓮華様になにかあればただでは置かないからそのつもりでいる」

【雪蓮】「何気に一番最初に呼んじやってるし…。まあ、いいわ。私の事は雪蓮でいいから、これから気をつけなさい。蓮」

【蓮】「は、はあ……」

(……………)

雪蓮でいいといわれたが、これが真名を呼んでいい条件ってことか？

【冥琳】「そういえば、まだ名乗ってもいなかったな。蓮華さまに名乗るというのもおかしな気分だが」

微笑し、その人はこちらに顔を向けた。

【冥琳】「周瑜。それが私の名だ。だが、雪蓮も許したことだ。私のことも真名で呼んでもらっていい」

【蓮】「えつと、めい、りん？」

【冥琳】「ああ」

【雪蓮】「ただ、これからが問題ね。私達はいいとして、蓮が皆の真名を呼ぶのはまずいわ」

【冥琳】「極力名前を呼ばなければならぬような会話を避けるし

かないな。」

【蓮】「分かりました。」

ある程度話もついたようで、雪蓮の表情がすこし柔らかくなった。

【雪蓮】「まあ、詳しい話はまた今度あらためてしましょうか。まだ蓮もきちんと把握できていないだろうし」

【冥琳】「そうだな」

それは正直ものすごく有難かった。さすがにこのまま立て続けに質問攻めにされるとこちらの身が持ちそうに無かった。

【雪蓮】「じゃあね。あんた達、今日は部屋にもどってなさいよ？あんまり他人と接触しないように」

【蓮】「はい」

二人はそれだけ告げて、部屋を出て行った。

それを見送った後、俺も後を追うように部屋をでて、今日目を覚ました孫権の部屋へ向かう。

【蓮】「はあ……」

ギシリと音を立てて、寝台にもたれかかる。目が覚めてから緊張の連続だった。それがようやく解けて疲れが一気に降りかかってきた。

部屋に戻った後、窓から空を見つめるとなんだかオレンジ色っぽい気がする。まだ、微妙に青が残っていたためにこれから夕暮れに入ろうかという時刻。

(……………なんでこんなやつに姉さまは真名なんか……)

なにやら孫権はブツブツ言ってる。さっきの話のときも何かブツブツ言っていた気がしたが、もしかしてずっとこうだったんだろっか。

(…なにが蓮よ。人の気もしらないで)

部屋には誰もいないのに声だけは聞こえてくるというのも変な気分だ。それが愚痴ならなおさら。ある意味ホラーだ。

【蓮】「悪かったな。こんなことになって」

(……………え?)

耐えかねて、俺は口を開いていた。天井に向かって投げられた言葉は重力に従ってそのまま自分の中のもう一人へと注がれる。

【蓮】「もともと死のうとして、こうなったんだ。俺の元の体だった、もうぐちゃぐちゃだろうし。…ほんとに、悪かった。」

かすかに覚えている、自分が死ぬ瞬間。激痛の中で捉えたのは、赤色と白と黒。自分が何処かへ行ったようになり、そのまま意識が落ちていく。

(…っ)

【蓮】「ああ、悪い、お前にも伝わるんだっただな」

俺は思い出すのをやめた。こんな光景をわざわざ女の子に見せる必要は無い。こんなもの、嫌な気分させるだけだ。

【蓮】「そのうちちゃんと出て行ってやるから、心配するなよ」

(………当たり前だ)

偉そうに言っているが、どこか遠慮がちで、思わず笑ってしまうような可愛げがあった。

【蓮】「俺、蓮っていうらしいぞ」

(姉さまが勝手にきめたんだろう?)

【蓮】「お前の名前の半分、もらったみたいだな」

(いい迷惑だ)

【蓮】「………ついでだし、全部くれないか？」

(………)

自分でも突然何を言っているのか。孫権が黙り込むのも当然だ。今朝言われたばかりだ。体を奪われて、名前まで奪うなんて…と。

だから、俺は尋ねた。くれないかと。

少しの間が開いて、声が聞こえた。ひどく小さいものだったが、それは思考なのだから聞き逃すことが出来なかった。しかし、その言葉を聞けて、俺の気分はずいぶん軽くなっていた。

(……………蓮華だ。……………蓮)

【蓮】「よろしくな、蓮華」

これが、二人の呉王の出会い、そして始まりだった。

## 二人の蓮華（後書き）

普段は主に魏のお話を書いています。突然蓮華をメインに書いてみたくなったので、考えてみました。主人公の正体については物語にて。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3706i/>

---

恋姫 " Double "

2010年10月8日14時46分発行